

# 保育者のメンタルヘルスに関する国内外の研究の動向と展望

## — 学校教員を対象とした研究を参考に —

加藤 由美 ・ 安藤美華代\*

保育者のメンタルヘルスに関する研究の動向を明らかにすることを目的として、海外の先行研究を概観した。検索された27の研究の中で、保育者のバーンアウトに関する研究は12、ストレスに関する研究は7、仕事の満足度に関する研究は6、効力感に関する研究は3、対処法に関する研究は3であった。これらを国内の研究と比較するとともに、学校教員のメンタルヘルスに関する研究も参考としながら分析を行った。その結果、保育者のメンタルヘルスに関連する要因として、職場環境や職務内容、時間管理、賃金、職種、職員等や子どもとの関係、ソーシャルサポート、経験年数、仕事への関与等が挙げられ、国内の研究や学校教員を対象とした研究との類似点、相違点、今後の課題が示された。

Keywords：保育者，メンタルヘルス，バーンアウト，ストレス，効力感

### 1. はじめに

国内においては、近年、保育ニーズの多様化等に伴い、幼稚園教諭や保育士（以下、保育者と略記）の勤務環境が厳しくなっている。

保育者の身体的疲労感、慢性疲労徴候の訴えは高く<sup>1)</sup>、保育現場における労働条件のストレスは看過できない状況にある<sup>2)</sup>。保育者のストレスに関しては、既に多くの調査がなされており、保育者のストレスが高いことが示されている<sup>3) 4) 5) 6)</sup>。

特に、経験年数の少ない新任保育者はストレス耐性が低く<sup>7)</sup>、若い保育者ほどバーンアウトに陥る危険性が高いことが指摘されている<sup>8)</sup>。

様々な困難を抱えやすい新任保育者のメンタルヘルスに関する国内の先行研究の概観を行った加藤・安藤(2012)<sup>9)</sup>は、以下のような点を明らかにした。

まず、新任保育者の困難に関する要因としては、仕事量の多さや時間、多忙性等の勤務環境や、保育技術の未熟さや知識不足といった保育技能の問題、職場の人間関係の問題が挙げられた。また、困難へ

の対処法としては、勤務環境の整備、職員同士の保育観の共有、保育者効力感の向上、対人関係能力の向上、問題・ストレス対処法を身に付けることが挙げられた。

以上のように、国内においては保育者のメンタルヘルスに関する研究報告が多数みられ、その研究の動向が把握されている。一方、海外においても、保育者のストレスやバーンアウト、離職等に関する報告がみられる<sup>10) 11) 12) 13)</sup>。しかし、海外の保育者のメンタルヘルスに関する研究報告は十分に把握されていない状況にある。

保育者のメンタルヘルス対策に有効な手立てを探ることを目的として、本研究では、海外における保育者のメンタルヘルスに関する研究の動向を把握するため、過去24年間の先行研究の概観を行い、国内の研究と比較した。なお、今回は、保育者と同様の対人援助職であり、そのメンタルヘルスの問題が懸念されている学校教員<sup>14)</sup>を対象とした研究の動向も併せて把握し、保育者のメンタルヘルスの問題

兵庫教育大学大学院連合学校教育研究科（岡山大学配属） 673-1493 兵庫県加東市下久米942-1（700-8530 岡山市北区津島中3-1-1）

\*岡山大学大学院教育学研究科 心理・臨床学系 700-8530 岡山市北区津島中3-1-1

International trends and prospects of recent research on mental health among preschool teachers  
— Psychological distress of preschool teachers compared with that of school teachers —

Yumi KATO and Mikayo ANDO\*

The Joint Graduate School in Science of School Education (Doctor's course), Hyogo University of Teacher Education  
942-1 Shimokume, Kato-shi, 673-1498 (placed at Okayama Univ.)

\*Division of Psychology and Clinical Education, Graduate School of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushimanaka, Kita-ku, Okayama 700-8530

を考える上での示唆を得たいと考えた。

## 2. 保育者のメンタルヘルスに関連した先行研究の概観

### 文献選択の基準と検索方法

概観するために選択された文献の基準は、保育者のメンタルヘルスに関するものとして、(1)保育者の困難やストレス、バーンアウトの要因に関するもの、(2)(1)を軽減させるための対処法等に関するものとした。本研究の目的に合った文献を選択するために、電子ジャーナルデータベース（APA PsycINFO, PubMed, Google Scholar, CiNii）を使用した。

キーワードとして「保育者」(caregiver, caretaker, preschool teacher, nursery and kindergarten teacher), 「保育士」(childcare worker, nursery school worker), 「ストレス」(work stress, occupational stress), 「ストレッサー」(job stressor), 「困難感」(feeling of difficulty, psychological distress), 「バーンアウト」(burnout), 「メンタルヘルス」(mental health), 「促進」(promotion), 「効力感」(efficacy), 「対処法」(coping), 「介入」(intervention), 「予防」(prevention), 「プログラム」(program)を用いた。年代は、1990年～2014年（過去24年間）に限定した。なお、選択に当たっては、検索によって得られた題名、アブストラクト、キーワードにより、本研究の目的に合わないものは除外した。

### 分析の方法

分析にあたっては、保育者の困難の要因と対処法に関する研究を行った加藤・安藤（2012）<sup>9)</sup> および教師バーンアウト研究において、バーンアウトの要因に関するメタ分析を行った落合（2003）<sup>15)</sup> の手法を参考とした。具体的には、対象となる先行研究を縦軸に、困難やバーンアウト等に関連する要因を横軸に示し、該当する要因に印をつけて一覧表にまとめるという方法である。なお、本研究の分析に関する示唆を得るため、保育者と同様に子どもに関わる対人援助職である学校教員のメンタルヘルスに関する研究との比較を行った。

## 3. 結果

検索された文献の内、本研究の目的に合っていると判断した海外の文献は27であった。その内、メンタルヘルスに関する要因として、保育者のバーンアウトに関する研究は12、保育者のストレスに関する研究は7、保育者の仕事の満足感に関する研究は6、保育者の効力感に関する研究は3であった。

保育者のメンタルヘルスを保持増進させるための対処法に関する研究は3（以上の研究は一部重複）であった。表1に①ストレス、②バーンアウト、③効力感、④仕事の満足感、⑤対処法に関連する要因を示した。なお、検索時のキーワードには含まれていないが、「仕事の満足感」(job satisfaction)に関する文献が複数検索されたため、表1に取り上げることとした。表1の「①～⑤に関連する要因」として●が多く付されている項目を中心に取り上げて報告する。

### 【職場環境】

ストレスやバーンアウトの要因について検討した19の研究のうち、職務との関連<sup>16)</sup> <sup>17)</sup> は13、労働環境<sup>18)</sup> との関連は10、職種との関連は7、賃金との関連は5、時間管理については2の研究が指摘していた。

職務に関することとして、不明確な曖昧な仕事状況への葛藤<sup>13)</sup>、仕事役割の競合と役割の曖昧さ<sup>19)</sup>、業務役割の曖昧さ<sup>20)</sup> がバーンアウトの要因であることが指摘されていた。

また、幼稚園教師は、わずかに感情の消耗感を経験するのに対して、保育労働者は非人格化、個性喪失の感情の消耗感をより経験していた<sup>21)</sup> との報告から、幼稚園教師と保育労働者という職種による違いが見られた。そして、公立に勤務する者は、私立に勤務する者よりも仕事そのものや管理者に満足しており、仕事の満足感と職場環境は、公立の幼児教育者の感情の消耗にネガティブに寄与していた<sup>11)</sup>。バーンアウトにつながる情緒的消耗感は、管理職や非正規保育者よりも常勤保育者で高く、それは職場での仕事量の多さと関連していた<sup>17)</sup>。

少数であるが賃金との関連が報告されており、昇進の機会、仕事の選択肢の有用性が知覚されていることが、離職の意図に著しく関係していたとの報告もあった<sup>18)</sup>。

公的機関に勤務する者は、民間機関に勤務する者よりも、良い給与、福利厚生等を得ている<sup>22)</sup> ことから、仕事の満足感が高い<sup>11)</sup> <sup>23)</sup> と推察された。

### 【対人関係】

ソーシャルサポートとの関連は8、職員等との関係は6、子どもとの関係は6の研究が指摘していた。

職員とのコミュニケーション、ソーシャルサポートの低さや欠如<sup>13)</sup> <sup>24)</sup> がバーンアウトにつながる要因となっていた。また、職員との人間関係が保育者のストレス源となっていた<sup>25)</sup>。

スーパーバイザーと協働者がよりよい関係である



場合は、有意に個性喪失の低いレベルが報告されており<sup>20)</sup>、人間関係の良好度はメンタルヘルスに強く関連している<sup>26)</sup>と考えられる。

また、子どもへの関与が高いレベルの教師が、スタッフの協同作業の高いレベルの園で働く教師の効力感と強く関連していた<sup>27)</sup>との報告から、保育者としての効力感には、保育者同士の連携のあり方も関わってくるということが伺えた。

子どもとの関係においては、学級内の社会的相互作用の質が低く、子どもの行動管理に苦慮することが高いストレスとなっていた<sup>28)</sup>。

### 【個人のあり方】

経験年数との関連は7、仕事への関与との関連は4、性格、性との関連はそれぞれ1の研究が指摘していた。

経験年数が2～8年が最も仕事のストレスや転職が多く、転職の割合は最初の2年間が高い<sup>29)</sup>との報告がある。また、幼児の教師は他の教師の初年時に比べて、平均的にバーンアウトのレベルが低い。しかし、初等、中等教育の教師が就職後、徐々にバーンアウトが増加するのに対して、幼児の教師は2年目には明らかにバーンアウトが増大している<sup>30)</sup>との報告や年齢とバーンアウトの関連性を指摘した研究<sup>12) 20)</sup>もあった。

仕事上の関与の低さ<sup>24)</sup>は転職や離職の意図を予測する要因の1つとなっており、業務における高い自主性<sup>31)</sup>とバーンアウトとの負の関連が示唆された。

教師が積極的に自分の仕事に影響を与える協議プロセスに関与すること<sup>32)</sup>や、職員の成長に焦点を当てたミーティングと子どもの相談に関するミーティングは、感情の枯渇に逆らい、仕事の満足度に関係していること<sup>18)</sup>、保育者は子どもに関わるという基本的な仕事に集中する時間がある時に幸福を増大すること<sup>33)</sup>から、保育者本来の職務に積極的に取り組めるようにすることの大切さが指摘されていた。

### 【対処法】

主に感情に焦点を当てたスタイルよりも、問題に焦点を当てた対処スタイルが効果的である<sup>34)</sup>との指摘があった。また、教師のための行動管理の方法とトレーニングを行った結果、自身の教育実践についてのより前向きな感じ方と同様に仕事をコントロールできる感覚が向上したとの報告<sup>35)</sup>や、保育者のストレスへの対処法として、祈る、瞑想、ストレスフルな場面のための計画をたてる等、実践的なアプローチが提供された事例の報告<sup>36)</sup>も見られた。

### 【学校教員を対象とした研究】

次に、学校教員を対象としたメンタルヘルスに関する研究の概要を把握するため、前述の文献選択の基準の「保育者」を「教師」(school teacher)とし、同様の方法で検索を実施した。本研究の目的に合っていると判断した25の研究について、学校教員のストレス、バーンアウト、効力感等に関連する要因を表2に示した。

#### (職場環境)

職務との関連は9、労働環境との関連7、時間管理との関連は4、職種との関連は2の研究が指摘していた。これによると、職務における葛藤<sup>37)</sup>、具体的には役割の曖昧な職務や実施困難な職務に関するストレス<sup>38)</sup>が挙げられた。また、労働環境<sup>39)</sup>、時間管理<sup>40) 41)</sup>も教師のストレス源となっており、常勤であること<sup>40)</sup>との関係性も示唆された。管理職との葛藤<sup>42)</sup>も含めた学校組織特性という労働環境が直接バーンアウトに影響を及ぼすとの報告<sup>43)</sup>もあった。

#### (対人関係)

職員等との関係は10、子どもとの関係は6、ソーシャルサポートとの関連は6の研究が指摘していた。

対人関係の悪さがストレスに悪影響を及ぼす重大な要因である<sup>44)</sup>として、教師同士の関係の重要性<sup>45)</sup>が指摘されていた。学校内のコミュニケーション<sup>46)</sup>、同僚との円滑な人間関係がもてるよう職場環境を整えること<sup>47)</sup>、上司・同僚からのサポートの有用性<sup>43) 44)</sup>が示唆された。また、子どもの問題が大きなストレス源となっているとの報告<sup>48)</sup>もあった。

#### (個人のあり方)

経験年数との関連は7、性との関連は5、仕事への関与との関連は2、性格との関連は1の研究が指摘していた。

教師としての経験年数がストレスに影響している<sup>39) 45)</sup>、若い教師はバーンアウトが高く<sup>48)</sup>、新任教師の効力感は受け取ったサポートに関連している<sup>49) 50)</sup>との報告があった。また、教えることの効力感と仕事の満足感との関連<sup>51) 52)</sup>や、女性は男性よりストレスが高い<sup>40) 44)</sup>、女性は子どもの行動による学級のストレスを感じているとの指摘<sup>53)</sup>もあった。また、家庭の問題がストレスになっているとの報告<sup>41)</sup>もあった。

#### (対処法)

どの年代の教師も、職員が最もストレスを感じる



保育者のストレスやバーンアウトに及ぼす影響が指摘されていた。これは、仕事の多さ、時間の欠如<sup>57)</sup>、業務量の多さ、多忙さ<sup>58)</sup>が精神的健康に影響を与えるという国内の研究報告と同様であった。保育者の労働時間が長い程、仕事の処遇への満足度は低く、疲労感や業務が過重であることへのストレスが大きい<sup>59)</sup>ことから、保育者が仕事の満足度を得るためには、労働条件を整えること<sup>60)</sup>、職場環境の整備<sup>26)</sup>が重要であると考えられる。

今回、海外の研究において指摘されていた「不明確で曖昧な仕事状況が保育者のメンタルヘルスにネガティブな影響を与える」<sup>13) 19) 31)</sup>ことは、国内の研究においてはあまり指摘がなされていなかった点である。これに関しては、国内でも同様の傾向が見られるのかどうか、更なる分析が必要である。

また今回、保育士か幼稚園教諭かという職種の違いや、公立か私立か、常勤か非常勤かといった職場環境や職務状況の違いが保育者のメンタルヘルスに異なる影響を与えていることが窺えた。

そして、新人から4、5年目までは対人的不安が漸増する<sup>61)</sup>、経験年数が短いほどバーンアウトに陥る危険性が高い<sup>8)</sup>、新任はベテランに比べてストレスが高い<sup>62)</sup>といった国内の研究報告と同様に、保育者の経験年数とメンタルヘルスとの関連についても示唆が得られた。

国内においては、職員同士の人間関係が保育者にとって大きな負担となっていることが多数指摘されているが<sup>3) 4) 5) 6) 63) 64) 65)</sup>、海外の研究においては、この点に着目した報告はあまり見られなかった。しかし、職場のコミュニケーションやソーシャルサポートの重要性については指摘がなされていた。

また、抑うつ感が効力感に関係していたとの報告があり<sup>66)</sup>、効力感の低い保育者をサポートすることの必要性<sup>67)</sup>が指摘されていた。国内においても、効力感は、一般的・精神的疲労を軽減するのに有効な要因であり<sup>68)</sup>、保育職のやりがいや保育者としての働きがいに影響を与える<sup>5) 69)</sup>との報告がある。そのため、日常の保育活動で要求される保育スキルに関して自信が持てる<sup>58)</sup>といった保育者としての効力感を高めることが大切であると推察された。

保育者個人のあり方として、積極的に自分の仕事に関与することの大切さが挙げられたが、これは、主体的に仕事にかかわる態度の大切さを指摘した国内の研究<sup>70)</sup>と同様であった。

対処法に関しては、問題に焦点を当てた対処スタイル、行動管理の方法とトレーニング、ストレスへの対処法等の実践的なアプローチの方法が報告され

ていた。国内においても、「問題直視・認知操作」型のコーピングの有用性<sup>46)</sup>や問題中心コーピング、援助希求コーピングのレパトリー、スキルを身に付けるための心理教育<sup>8)</sup>、自己主張の仕方のスキル<sup>71)</sup>や社会的スキルトレーニング等<sup>72)</sup>の導入の必要性が指摘されている。人間関係の改善や対人関係スキル向上を目指すプログラムの必要性については、学校教員を対象とした研究においても同様の指摘がなされていた。

## 5. まとめと今後の課題

保育者のストレス、バーンアウト、効力感等に関連した海外の先行研究を概観し、国内の保育者を対象とした研究と比較するとともに、学校教員のメンタルヘルスに関する研究も参考としながら、保育者のメンタルヘルスに関する研究の動向を明らかにした。

その結果、職場環境や職務内容等が保育者のストレスやバーンアウトに影響を与えていること、経験年数とメンタルヘルスとの関連、効力感、対処法等に関しては、国内の研究と同様の報告が見られた。また、これらの内容は、業務量の負担軽減や職場環境の整備、対人関係スキルの向上の必要性等について指摘のあった学校教員のメンタルヘルスに関する研究の結果と共通する部分が多く見られた。

一方、不明確で曖昧な仕事状況が保育者のメンタルヘルスにネガティブな影響を与えるといった国内ではあまり指摘のなかった点に関する報告がなされていた。また、国内の研究では保育者のメンタルヘルスに及ぼす影響が大きいとされている職場の人間関係に着目した研究はあまり見られなかった。今回の結果では、保育士か幼稚園教諭かという職種の違い、公立か私立か、常勤か非常勤かといった職場環境や職務状況の違いが保育者のメンタルヘルスに異なる影響を与えていることが推察された。

保育者のメンタルヘルスの問題を考える上では、メンタルヘルスに影響を及ぼす要因に関するより詳細な分析を行うとともに、保育者の職種の違いや勤務環境、職務の状況に応じ、経験年数に配慮しながら、仕事の満足感が得られるようにすること、適切な物の見方や行動の仕方、対処法を身に付ける機会を設けること等が必要であると考えられる。

そうした意味から今後は、職種や職務内容、経験年数等、保育者の置かれた状況に応じた有効な対処法について明らかにすることや保育者個人のあり方と職場環境の改善という双方向からのアプローチについて検討することが望まれる。

引用文献

- 1) 那須野康成(2006). 保育者のストレスに関する研究(その1) 愛知学泉大学・短期大学紀要, 41, 135-139.
- 2) 垣内国光・東社協福祉士会(2007). 保育者の現在—専門性と労働環境— MINERVA福祉ライブラリー, 94, ミネルヴァ書房.
- 3) 赤田太郎・滋野井一博・小正浩徳・友久久雄(2009). 保育士のストレス要因と保育の労働環境に関する研究—身体的苦痛のストレス, 保育上のストレス, 家族関係のストレス, 精神的健康状態, 満足度を通して— 龍谷大学教育学会紀要, 8, 35-51.
- 4) 石川洋子・井上清子(2010). 保育士のストレスに関する研究(1) —職場のストレスとその解消— 文教大学教育学部紀要, 44, 113-120.
- 5) 金城悟・安見克夫・中田英雄(2011). 保育職の大変さやりがいに関する保育者の意識構造について—M-GTAによる分析の試み— 東京成徳短期大学紀要, 44, 25-44.
- 6) 宮下敏恵(2010). 保育士におけるバーンアウト傾向に及ぼす要因の検討 上越教育大学研究紀要, 29, 177-186.
- 7) 上村眞生・七木田敦(2011). 保育士のレジリエンスとメンタルヘルスの関連に関する研究—保育士の経験年数による検討— 広島大学大学院教育学研究科紀要, 3(60), 249-257.
- 8) 齋藤恵美・田中紀衣・村松公美子・橘玲子・宮岡等(2009). 保育従事者のバーンアウトとストレス・コーピングについて 新潟青陵大学大学院 臨床心理学研究, 13, 23-29.
- 9) 加藤由美・安藤美華代(2012). 新任保育者の抱える困難に関する研究の動向と展望 岡山大学大学院教育学研究科研究集録, 151, 23-32.
- 10) McGrath, B.J. & Huntington, A.D. (2007). Goal structures and teachers' sense of Efficacy: Their relation and association to teaching experience and academic level. *Journal of Educational Psychology*, 99(1), 181-193.
- 11) Nikolaos, T., Evridiki, Z. & Vasilios, G. (2006). Job satisfaction and burnout among Greek early educators: A comparison between public and private sector employees. *Educational Research and Review*, 1(8), 256-261.
- 12) James, T.D., Tammy, L.B. & Nikki, W. (2002). Burnout Among Childcare Workers. *Residential Treatment for Children & Youth*, 19(4), 61-77.
- 13) Goelman, H., & Guo, H. (1998). What we know and what we don't know about burnout among early childhood care providers. *Child Youth Care Forum*, 27(3), 175-199.
- 14) 田上不二夫・山本淳子・田中輝美(2004). 教師のメンタルヘルスに関する研究とその課題 教育心理学年報, 43, 135-144.
- 15) 落合美貴子(2003). 教師バーンアウト研究の展望 教育心理学研究, 51, 351-364.
- 16) Tsai, E., Fung, L., & Chow, L. (2006). Job satisfaction and burnout among Greek early educators: A comparison between public and private sector employees. *Educational Research and Review*, 1(8), 256-261.
- 17) Hisashige, A. (1993). Occupational Influences Relative to be Burnout Phenomenon Among Japanese Nursery School Teachers. *Environmental Research*, 63, 219-228.
- 18) Andrew, J.S., Mark, J.B. & Douglas, R.P. (1993). Communication, satisfaction, and emotional exhaustion among childcare center staff: Directors, teachers, and assistant teachers. *Early Childhood Research Quarterly*, 8(2), 221-233.
- 19) Elizabeth, E.M. (1994). Conflict and Ambiguity over Work Roles: The Impact on Child Care Worker Burnout. *Early Education and Development*, 5(1), 41-55.
- 20) Kim, F.T., Kathy, R.T. & Dwayne, C. (1991). Burnout in teachers of young children. *Early Education and Development*, 2(3), 197-204.
- 21) Konstantina, R. (2013). Prevalence of burnout syndrome of Greek child care workers and kindergarten teachers. *Education 3-13 : International Journal of Primary, Elementary and Early Years Education*, 43(3), 249-262.
- 22) Kathleen, C.F., Marguerite, G. & Robert, M.O. (2010). Commitment to child welfare work: What predicts leaving and staying? *Children and Youth Services Review*, 32(6), 840-846.
- 23) Charles, A., Brenda, G.M., Astraea, A., Jessica, S-G. & Wendy, S. (2010). Differential Factors influencing public and voluntary child welfare workers' intention to leave. *Children and Youth Services Review*, 32(10), 1396-1402.
- 24) Michàl, E., Mor, B, Jan, A.N. & Amy, L. (2001). Antecedents to Retention and Turnover among Child Welfare, Social Work, and Other Human Service Employees: What Can We Learn from Past Research? A Review and Metanalysis. *The*

- Social Service Review*, 75(4), 625-661.
- 25) Alison, I.K. & Donna, C.B. (1995). Preschool teacher's experiences of stress. *Teaching & Teacher Education*, 11(4), 345-357.
- 26) 磯野富美子・鈴木みゆき・山崎喜比古 (2008). 保育所で働く保育士のワークモチベーションおよびメンタルヘルスとそれらの関連要因 小児保健研究, 67(2), 367-374.
- 27) Ying, G., Laura, M.J., Brook, S. & Virginia, T. (2011). Exploring factors related to preschool teachers' self-efficacy. *Teaching & Teacher Education*, 27(5), 961-968.
- 28) Li Grining, C., Raver, C.C., Champion, K., Sardin, L., Metzger, M., & Jones, S.M. (2010). Understanding and improving classroom emotional climate and behavior management in the "real world": The role of Head Start teachers' psychosocial stressors. *Early Education and Development*, 21(1), 65-94.
- 29) Todd, C.M., & Deery-Schmidt, D.M. (1996). Factors affecting turnover among family childcare providers: A longitudinal study. *Early Childhood Research Quarterly*, 11(3), 351-376.
- 30) Noble, K. & Macfarlane, K. (2005). Romance or Reality? : Examining Burnout in Early Childhood Teachers. *Australian Journal of Early Childhood*, 30(3), 53-58.
- 31) Elizabeth, E.M. (1993). Multiple Correlates of Burnout in Child Care Workers. *Early Childhood Research Quarterly*, 8(4), 499-518.
- 32) Viv M., Suzanne, E., Peter, B. & Clare, M. (2001). Teaching young children: perceived satisfaction and stress. *Educational Research*, 43(1), 33-46.
- 33) Outi Y-M., Satu, U. & Kaarina, M. (2012). Critical viewpoint to early childhood education teachers' well-being at work. *International Journal of human sciences*, 9(1), 458-483.
- 34) Kwok, S.W., Wai, H.C. & Sidney, R. (2009). Experience of Being Spurned: Coping Style, Stress Preparation, and Depersonalization in Beginning Kindergarten Teachers. *Journal of Research in Childhood Education*, 22(2), 141-154.
- 35) Fuhua, Z, C., Cybele, R. & Christine, L-G. (2011). Classroom-based interventions and teachers' perceived job stressors and confidence: Evidence from a randomized trial in Head Start settings. *Early Childhood Research Quarterly*, 26(4), 442-452.
- 36) Jennifer, J.R., L.Carson, L.A. & Costas, Y. (2009). Uncovering Common Stressful Factors and Coping Strategies Among Childcare Providers. *Child Youth Care Forum*, 38, 239-251.
- 37) 高木亮・田中宏二・淵上克義・北神正行 (2006). 教師の職業ストレスを抑制する方法の探索 日本教育経営学会紀要, 48, 100-114.
- 38) 高木亮・田中宏二 (2003). 教師の職業ストレスに関する研究—教師の職業ストレスとバーンアウトの関係を中心に— 教育心理学研究, 51, 165-174.
- 39) Max, S. & Sid, B. (1992). Teacher Stress: Examining a model based on context, workload, and satisfaction. *Teaching & Teacher Education*, 8(1), 31-46.
- 40) Pauline, R.O'Connor. (1990). Determinants of Teacher Stress. *Australian Journal of Education*, 34(1), 41-51.
- 41) 齊藤浩一 (2004). 中学校教師ストレスの構造的循環に関する実証的研究 東京情報大学研究論集, 8(1), 21-28.
- 42) 八並光俊・新井肇 (2001). 教師バーンアウトの規定要因と軽減方法に関する研究 カウンセリング研究, 34(3), 1-12.
- 43) 貝川直子 (2009). 学校組織特性とソーシャルサポートが教師バーンアウトに与える影響 パソナリティー研究, 17(3), 270-279.
- 44) 藤原忠雄・古市裕一・松岡洋一 (2008). 教師のストレスに関する探索的研究—性, 年代, 校種における差異の検討— 教育実践学論集, 10, 45-56.
- 45) 関山徹 (2009). 小学校教師における心理的ストレス過程 鹿児島大学教育学部研究紀要人文・社会科学編, 60, 309-319.
- 46) 宮下敏恵 (2009). 小・中学校教師におけるバーンアウト軽減方法の探索 上越教育大学研究紀要, 28, 95-104.
- 47) 中尾剛久 (2011). 教師の抑うつ症状と職業性ストレスの関連について 大阪市医学会雑誌, 60 (1・2), 9-16.
- 48) A.-S. Antoniou., F. Polychroni. & A.-N. Vlachakis. (2006). Gender and age differences in occupational stress and professional burnout between primary and high school teachers in Greece. *Journal of Managerial Psychology*, 21(7), 682-690.
- 49) Megan, T-M. & Anita, W.H. (2007). The

- differential antecedents of self-efficacy beliefs of novice and experienced teachers. *Teaching and Teacher Education*, 23(6), 944-956.
- 50) Anita, W.H. & Rhonda, B.S. (2005). Changes in teacher efficacy during the early years of teaching: A comparison of four measures. *Teaching and teacher education*, 21(4), 343-356.
- 51) Collie, R.J., Shapka, J.D. & Perry, N.E. (2012). School climate and social emotional learning: Predicting teacher stress, job satisfaction, and teaching efficacy. *Journal of Educational Psychology*, 104(4), 1189-1204.
- 52) Einar, M.S. & Sidsel, S. (2010). Teacher self efficacy and teacher burnout: A study of relations. *Teaching and Teacher Education*, 26(4), 1059-1069.
- 53) Klassen, R.M. & Chiu, M.M. (2010). Effects on teachers' self-efficacy and job satisfaction: Teacher gender, years of experience, and job stress. *Journal of Educational Psychology*, 102(3), 741-756.
- 54) 中川剛太・小谷英文・西村馨・井上直子・西川昌弘・能幸夫 (2000). 教師の対人ストレス方略の臨床心理学的研究(1)—実態調査にもとづく基礎研究— 国際基督教大学学報. I-A, 教育研究, 42, 101-123.
- 55) 松尾一絵・清水安夫 (2008). 小学校教師特有のストレスコーピングに関する研究—尺度開発と尺度モデルの検討— パーソナリティ研究, 16(3), 435-437.
- 56) Saul, N.J. & Joseph, C. (2001). A stress management course to prevent teacher distress. *International Journal of Educational Management*, 15(3), 131-137.
- 57) 西坂小百合 (2002). 幼稚園教諭の精神的健康に及ぼすストレス, ハーディネス, 保育者効力感の影響 教育心理学研究, 50, 283-290.
- 58) 嶋崎博嗣・森昭三 (1995). 保育者の精神健康に影響を及ぼす心理社会的要因に関する実証的研究 保育学研究, 33(2), 175-184.
- 59) 長町理恵子 (2009). 保育園と幼稚園における保育者の労働環境および保育者と親の満足度・ストレスの関係 生活社会科学研究, 16, 19-33.
- 60) 蘇珍伊 (2009). 保育者の仕事の満足度に関連する要因 現代教育学部紀要, 1, 173-178.
- 61) 齊木久代・中川香子 (2008). 保育職問題評価尺度作成の試み—保育職満足度, ストレス関連反応との関係— 保育士養成研究, 26, 全国保育士養成協議会, 77-86.
- 62) 上村真生・七木田敦 (2006). 保育士が抱える保育上のストレスに関する研究—経験年数およびソーシャルサポートとの関連からの検討— 広島大学大学院教育学研究科紀要, 3(35), 391-395.
- 63) 太田富美枝・太田光洋 (2009). 保育者の苦悩保育者同士の関係—感情のずれを乗り越える力— 特集 今, 保育者という仕事は 発達, 30(118), ミネルヴァ書房, 30-36.
- 64) 菊池政隆 (2007). 現任保育者の職業継続理由に関する調査 佐野短期大学研究紀要, 18, 221-227.
- 65) 望月珠美・石上智美・徳田克己・横山範子 (2001). 保育者養成校の卒業生における職場適応Ⅱ—保育従事者の職場における楽しみと困難を中心に・2000年の調査結果より— 日本保育学会大会研究論文集, 54, 808-809.
- 66) Yeon, H.K. & Yang, E.K. (2010). Korean early childhood educators' multi-dimensional teacher self-efficacy and ECE center climate and depression severity in teachers as contributing factors. *Teaching and Teacher Education*, 26(5), 1117-1123.
- 67) Szu-Yu, C. & Maria, S. (2010). The influence of job satisfaction on child welfare worker's desire to stay: An examination of the interaction effect of self-efficacy and supportive supervision. *Children and Youth Services Review*, 32(4), 482-486.
- 68) 田中昭夫 (2002). 保育者の蓄積的疲労徴候を過重にする要因・軽減する要因 保育学研究, 40(2), 24-30.
- 69) 齋藤友介 (2000). 保育士の働きがいと及ぼす保育者効力の影響 保育学研究, 38(2), 26-32.
- 70) 小野寺敦子 (2005). 保育士がとらえた苦勞—経験年数と性格特性に焦点をあてて— 目白大学短期大学部研究紀要, 42, 91-105.
- 71) 細井香 (2009). 保育・介護労働の現状と課題その3. 保育労働者の健康と労働環境および関連要因の検討児童養護施設および介護施設勤務者との比較から— 淑徳短期大学研究紀要, 49, 67-81.
- 72) 前田直樹・金丸靖代・畑田惣一郎 (2009). 保育者効力感, 社会的スキル及び職務満足感が保育士の精神的健康に与える影響 九州保健福祉大学研究紀要, 10, 17-23.
- 73) Kelly, A.L. & Berthelsen, D.C. (1995). Preschool teacher's experiences of stress. *Teaching & Teacher Education*, 11(4), 345-357.

- 74) Lutzky, S.M. & Knight, B.G. (1994). Explaining gender differences in caregiver distress: The roles of emotional attentiveness and coping styles. *Psychology and Aging*, 9(4), 513-519.
- 75) Steven, J.H., Kerri, D., Martha, B., Kelly, Y. & Deborah, A. (2009). Retention of Staff in the Early Childhood Education Workforce. *Child & Youth Care Forum*, 38(5), 227-237.
- 76) Sophia, A. & Giorgos, P. (2014). Factors affecting job satisfaction, stress and work performance of secondary education teachers in Epirus, NW Greece. *International Journal of Management in Education*, 8(1), 37-33.
- 77) 後藤靖宏・田中妙 (2000). 女性教師のストレスの特徴—小学校・中学校の場合— 大分大学教育福祉科学部研究紀要, 127-135.
- 78) Ji Y. Honga. (2012). Why do some beginning teachers leave the school, and others stay? Understanding teacher resilience through psychological lenses. *Teachers and Teaching: theory and practice*, 18(4), 417-440.
- 79) Rune, H., Rune, G. & Kari, S. (2012). Newly qualified teachers' work engagement and teacher efficacy influences on job satisfaction, burnout, and the intention to quit. *European Journal of Teacher Education*, 35(3), 347-357.
- 80) Abbas, A.Z. & Niloofar, A.S. (2012). Experienced and Novice Iranian Teachers' Perceptions as to the Effect of Intrinsic Factors on Teacher Efficacy. *Basic Research Journal of Education Research and Review*, 1(1), 4-14.

付記

本研究は、平成26～28年度科学研究費【挑戦的萌芽研究】「新任保育者のメンタルヘルス対策の構築に関する研究」（課題番号:26590170, 研究代表者:加藤由美)の助成を受けて行った研究成果の一部である。